

②論文要旨（博士後期課程）

|   |
|---|
| <p>論 文 要 旨</p>  |
| <p>申請者氏名 水信 渉</p>   |
| <p>申請学位 博士（言語教育学）</p>   |
| <p>主論文題目 日本語のプロソディーの聴取と生成に着目した指導方法の研究</p>   |
| <p>-ローパスフィルターとハミングの使用を通して-</p>  |
| <p>主論文要旨（邦文は4,000字以内</p>  |
| <p>本研究は、日本語学習者（以下、「学習者」と称する。）の発音学習時における負担を軽減し、また、発音指導に関する専門的な知識や経験がなくとも、日本語教師（以下、「教師」と称する。）であれば誰が行っても一定の効果がある発音指導方法の確立を目指すものである。本論文は6章から成る。以下、各章の概要を記す。</p>   |
| <p>第1章では、日本語教育における音声教育の現状を踏まえ、発音指導の重要性と本研究の意義について述べた。本研究では、学習者の音声教育に対するニーズが高いにもかかわらず、体系的な音声教育が行われていない理由として、「音声教育を行う時間がない」といった物理的制約と教師の音声教育に関する知識や発音指導経験などの技術的な問題が影響していることを指摘し、専門的な知識や発音指導経験を有していなくても、日本語教師であれば誰が行っても一定の効果が期待できる発音指導方法を確立することを本研究の意義として掲げた。</p>      |
| <p>第2章では、実際に出版されている発音指導用教材を概観し、教材の発音指導方法の傾向を探った。多くの発音指導用教材では、日本語によるモデル音声以外にアクセント記号やイントネーションを曲線で示したものなど、発音に関する視覚的な情報が提供されており、シャドーイングやVT法などが理論的な方法として取り入れていることが判明した。しかし、教材で提示されている情報は膨大であり、発音学習時の学習者の心理的負担は大きく、教師が適切に配慮できなければ、効果的な発音学習どころか拒否反応を起こす恐れがあることについて述べた。</p> |
| <p>第3章では、新しい発音指導方法の提案を行った。まず、学習者のF0の分析を通して、学習者の訛りの主な原因が、単音の誤りではなく、アクセントやリズム、イントネーションなどのプロソディーの誤りであることを明らかにした。また、第2章において分析した発音学習用教材を</p>   |

を踏まえ、本研究の発音指導で使用するイントネーションパターン、モデル音声、発話方法についても熟考し、プロソディーの聴取と生成に特化した指導方法を提案した。

第4章では、第3章で提案したローパス音とハミングを使用した発音指導方法を用い、その効果を検証した。日本語学校に在籍している31名の初級学習者に対し、発音指導を4週間行い、4週間の最初と最後に録音した学習者の発話を母語話者に聞いてもらい、発音が改善されたかどうか、インタビュー調査により評価した。

結果は、発音指導を受けた17名と発音指導を受けてない14名には、有意差が認められた。ローパス音のみによるモデル音声の提示、発話をハミング中心に行ったことで、学習者が注意を向けるべき項目が必然的にプロソディーのみに絞られたため、プロソディーの違いに気が付くようになったと考えられる。発音改善に関する母語話者の評価の多くが、プロソディーの改善に関するコメントだったことから、ローパスフィルターとハミングを使用した発音指導はプロソディーの改善に効果的であるといえる。従来の発音指導とは異なった方法で発音練習を行ったが、発音指導方法における一つの選択肢として、十分に効果が得られたと言える。

第5章では、音声教育を専門としない「一般」の教師が発音指導を行っても、学習者の発音が改善されるかどうかを検証するため、第4章と同様、ローパスフィルターとハミングを使用した発音指導を行い、その結果について述べた。初級から中級の4クラス、68名の学習者を対象に、4名の教師が発音指導を行い、母語話者に発音指導後の学習者の発話を評価してもらったが、学習者の発音が改善されたというコメントが多く見られ、実験後に行った教師に対するアンケート調査においても、発音指導の効果を実感したという声を聞くことができた。

第6章は、各章の振り返りと結論をまとめ、今後の課題として、教師の指導技術向上のための教師研修のあり方、音声教育に対する学習者と教師のモチベーションを高めるために、日本語の語学試験のカリキュラムを見直す必要があることを指摘した。また、学習者の発話に対して評価を行うシステムの開発は十分ではなく、学習者が自身の発話に対してフィードバックを行い、自律的に学習を進めていけるような環境の整備が、他の学習項目と比べ、かなり後れを取っていることを指摘し、このようなシステムの開発が今後の音声教育における重要な課題であり、今後筆者が取り組むべく研究目標であると定めた。